

公衆衛生と効率優先 — 空港の安全と自治体準備 —

明治大学名誉教授、日本自治体危機管理学会会長

中 邨 章



国際的イベントと空港

ここ数年、海外からの旅行者が増えている。その数は2013年に1000万人を突破し、円安などの影響でこの先も増加傾向は続くと思される。2019年には日本でラグビーのワールドカップが開催され、外国からの観戦客が各地に散らばる競技場を訪れるはずである。加えて、2020年は東京オリンピック開催の年である。これに合わせ海外からの旅行客は、一段と加速する見通しが立てられている。政府は2020年にその数は現在の2倍、2000万人を超えると予測している。将来は3000万人というのが、政府のターゲットである。

国外からの旅行客拡大の影響を受けるのは、全国各地に広がる空港である。狭い国土でありながら、日本ほど空路のネットワークが充実している国はない。過剰と思われる空港数であるが、その管理主体はきわめて複雑である。成田空港や関西空港など民間会社が運営するところ。羽田や新千歳など国が直接、管理する形

式。それに旭川や秋田などは、国と県が共同運営する特定地方管理空港である。中でも、県が管理する地方管理空港が54件と最も多い。他にも航空自衛隊と共用する空港などがあるが、日本にある空港の総数は97件になる。現状では、京都府、奈良県、滋賀県など10県がエアポートを持たない。日本は世界でも珍しい空港過密国である。

空港があれば便利である。その分、飛行場を抱える自治体は、さまざまな事故や危険に直面することを覚悟しなければならない。その確率は、ラグビー・ワールドカップや東京オリンピックの開催で格段に増える。話題に上るエボラ熱は、成田や羽田空港に限られた問題ではない。佐賀空港や徳島空港で発生しても不思議ではない。ラグビー・ワールドカップの会場誘致には熱心な首長もいるが、人の流れが増える分、テロや感染症など予期しない事態が起こる可能性が増える。また、管理主体が錯綜していることにも注意が必要である。危機に際して中央政府と自治体の関係、自治体間の連絡など、首長が平時から考えておくべき課題は多い。

さらに、自治体はこの先、危機発生に備え公衆衛生面での取り組みを再検討することが望まれる。これまでの危機対策は、この点が不十分であった。エボラ熱はともかく、感染症、食中毒、飲料水を含む市民の健康管理について、自治体は今以上の工夫が必要である。保健所や病院、それに開業医を含む地域医療機関との情報の共有、それに連携態勢の確立など、公衆衛生面で自治体が考慮すべき課題に際限はない。現状では、地域防災計画に公衆衛生に関する対策を付していない自治体も見られる。公衆衛生対策は、多岐にわたる不測事態の発生に備え自治体が今後、早急に検討すべき事項である。

効率性の追求と安全の確保

自治体でも企業でも、運営効率を上げることが重要な命題である。ところが、効率性だけを追求すると、危機管理面に落とし穴が生まれる。航空券のカタカナ表記が、その一例である。今回、それを身をもって体験した。ごく最近、九州に出張する機会があった。出発日、関係者は羽田空港に集合し、10時発の便で現地に向か

Risk Management

う予定になっていた。調査旅行には団体割引クーポン券が準備されたが、これは全員が集合し一括でチェックインする必要のある切符であった。ただ、わたしは8時前に羽田に到着したため、カウンターに向いて受付職員に、団体グループ券であるがチェックインは可能かを尋ねた。職員は、「ナカムラアキラ様ですね、大丈夫です」と手続きを進めてくれた。

10時に機内に乗り込み19日と指定された座席に座ると、「ナカムラアキラ様」と名前が連呼された。アナウンスに応じて本人であることを告げると、キャビン・アテンダントは搭乗券を確認したいと要求してきた。手荷物検査場に出てきた小片とクレジット・カードを差し出すと、女性職員は搭乗券に問題のないことを再度、確認してくれた。ホッとしながら満席の機内で離陸を待つと、「座席の重複発行があり、フライト便の変更に協力してくれるボランティアには1万円を提供する」という放送が流れた。これに応じて1名の乗客が飛行機を降り、代わって別人が機内に乗り込んできた。これで30分ほど飛行機の離陸は遅延した。

ヤレヤレと安心してしていると、突然、機外から保安担当の女性職員が血相を変えてわたしの座席に近づいてきた。職員は再度、搭乗券の提出を要求し、わたしがナカムラアキラであることを確認したいと言いつつ出した。指示に従い「19日ナカムラアキラ」と書かれた紙片を差し出したところ、「ナカムラアキラさんに間違いありませんね」と繰り返し質問した。「その通り」と答え

ると、トランシーバーで結果を保安部署に連絡していた。

このやりとりで飛行機はさらに遅延したが、そのころになると周囲の乗客は出発遅れの原因がわたしにあることに気づき始めた。機内の冷たい雰囲気は、何度も流れた「座席の重複発行による遅延」のお詫び放送で倍増した。冷たい目が針のようにわたしを突き刺し、九州までの1時間半、仮眠をとることはできなかった。目をじっと閉じ、「死んだふり」をしながらひたすら着陸を待った。

その後、乗客名簿にナカムラアキラが2人いたことが分かった。一人は、団体客のわたし、もう一人は正規料金を払ったナカムラさんだ。羽田で航空会社の職員が、別のナカムラさんの席をわたしに割り振ったのが「事件」の発端である。団体席に準備されていたわたしの席はすでに他の乗客に渡り、別のナカムラさんは本来の座席と団体席とともに失い、九州行き便に乗れなくなった。困った航空会社は、窮余の一策として1万円の報償金でボランティアを募ったというのが、事の顛末である。

効率性の落とし穴

今回の変事で、搭乗券がカタカナで表記されていることに疑問を持った。航空券を購入する際には、漢字やローマ字が使われる。飛行場でチェックインすると、それがカタカナ表記に変わる。カタカナに漢字が併記されていれば、今回の珍事は起きなかった。これまで、「中邨」と

いう姓と「章」の名を持つ人に出会ったためしはない。国際線ではローマ字表記が使われるが、搭乗までに少なくとも2回、パスポートとの照合が行われる。国内線に限って、最近ではクレジット・カードが搭乗券の代わりになることが多い。それが、保安、安全上、問題はないの不思議に思う。

オリンピックなど国際的なイベントが続く日本。スペイン文化圏で姓名は、父母や祖父母、祖祖父母などの名前が連記され、恐ろしく長くなるのが通例である。イスラム圏でも、ムハンマドやモハンマドの前後に家族の名前が併記されることが多い。どこまでが姓で、どこからが名になるのか、われわれ姓名だけで完結する日本人には理解できない。カタカナ表記は、経費節減になる。しかし、混乱と安全を引き起こす原因でもある。今回の出張は、効率と安全は必ずしも両立しないことを確認する貴重な経験になった。

筆者プロフィール

中邨 章 (なかむらあきら)

1940年大阪生まれ。1963年関西学院大学法学部卒業。1966年カリフォルニア大学パークレー校政治学部卒業 (B.A.)。1973年南カリフォルニア大学大学院政治学部博士課程卒業。政治学博士 (Ph.D.)。カリフォルニア州立大学講師、ブルッキングス研究所研究員、カナダ・ビクトリア大学特任教授などを経て、明治大学名誉教授。現在、日本自治体危機管理学会会長、自治大学校特任教授。危機管理関連の著書に『危機発生後の72時間』『行政の危機管理システム』などがある。